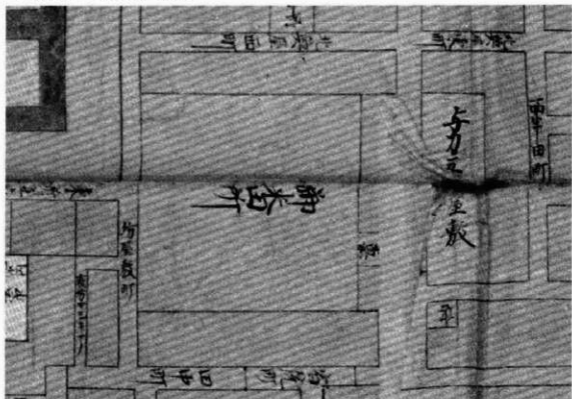
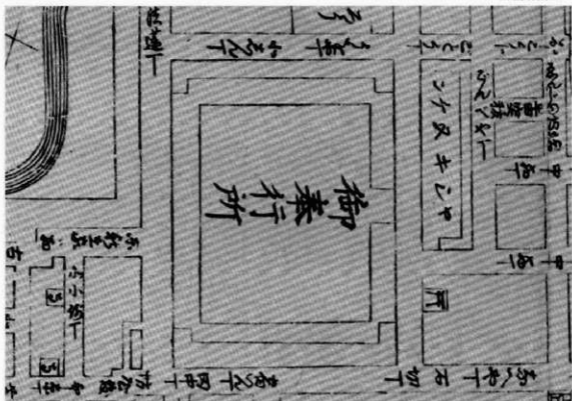


図版3 奈良奉行所

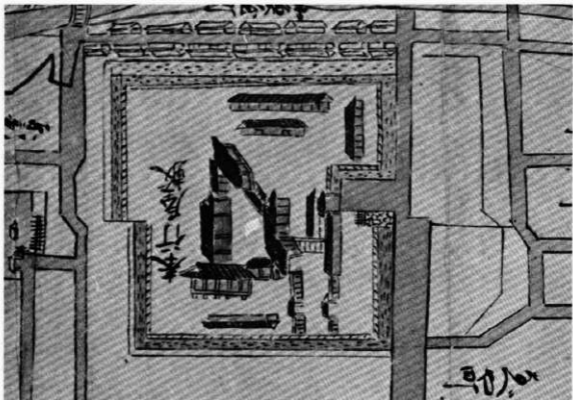


奈良繪圖（赤丸本）
天理図書館蔵

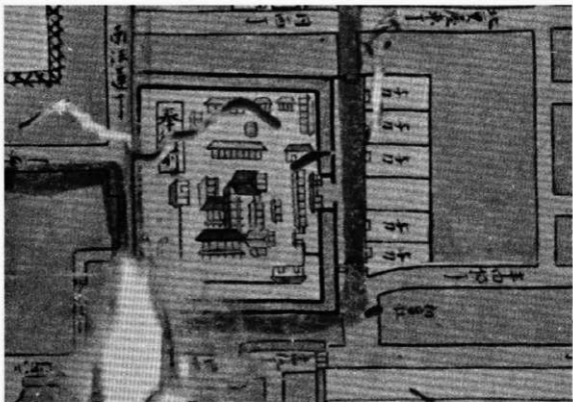


和州奈良之圖（天保15年）
東大寺図書館蔵

図版4 奈良奉行所

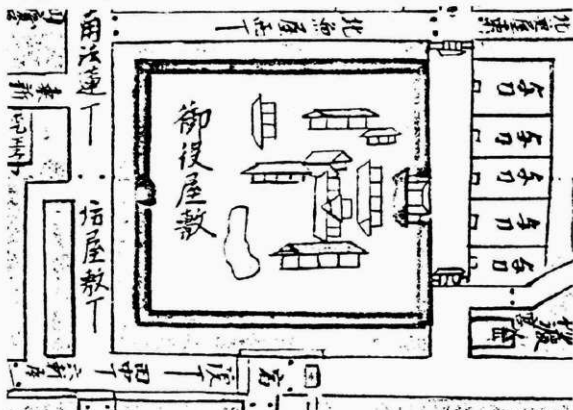


奈良繪圖（桑原氏旧藏）
東大寺図書館蔵

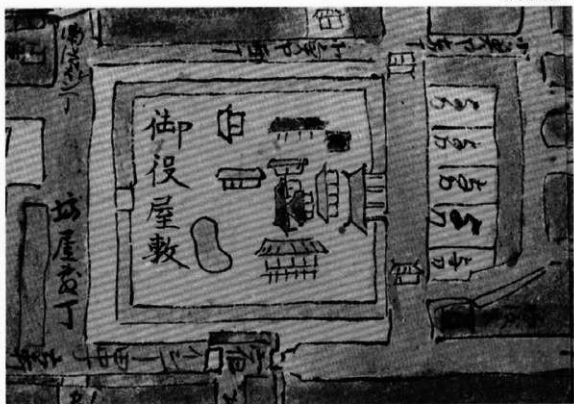


奈良繪圖（録角本）
天理図書館蔵

図版5 奈良奉行所

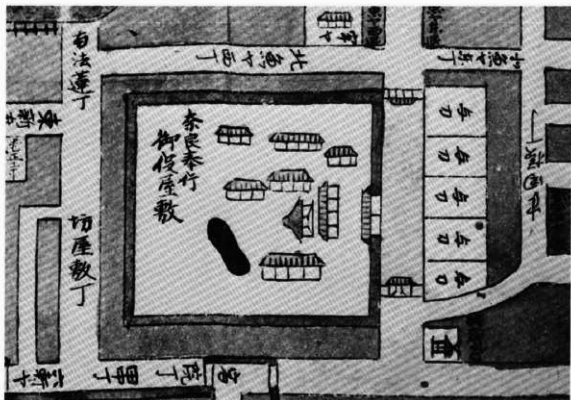


和州南都繪圖
天理図書館蔵

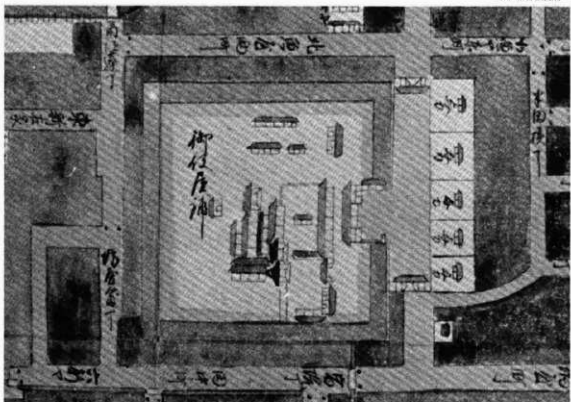


南都之圖 (西村本)
天理図書館蔵

図版6 奈良奉行所



奈良繪圖 (千早氏旧藏)
天理図書館蔵

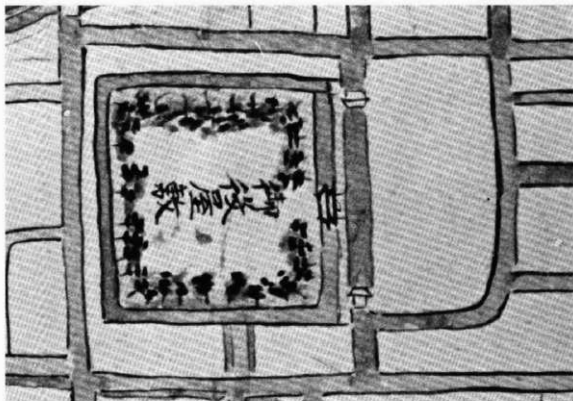


奈良繪圖 (徳田氏旧藏)
天理図書館蔵

圖版7 奈良奉行所

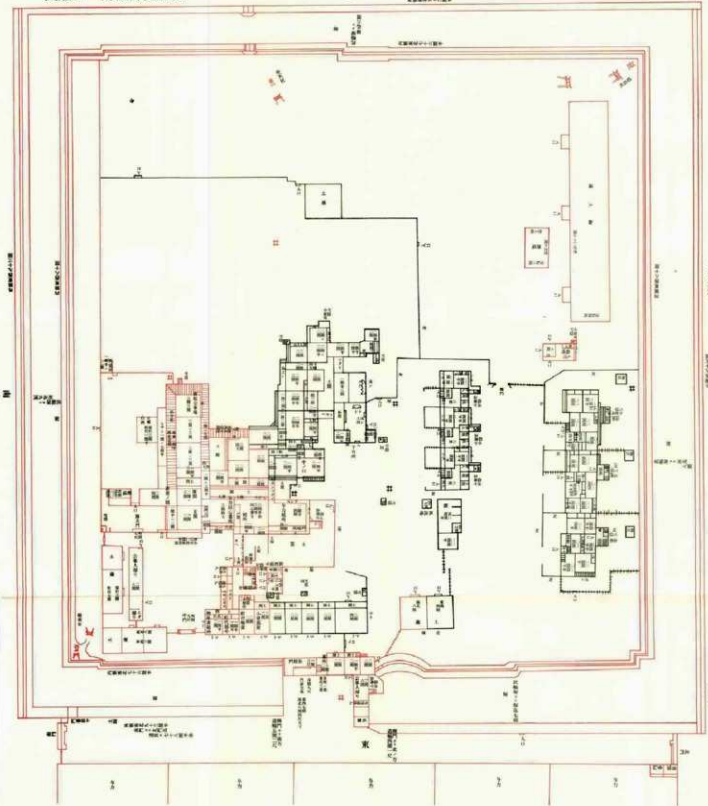


加太越奈良道見取繪圖
東京国立博物館藏



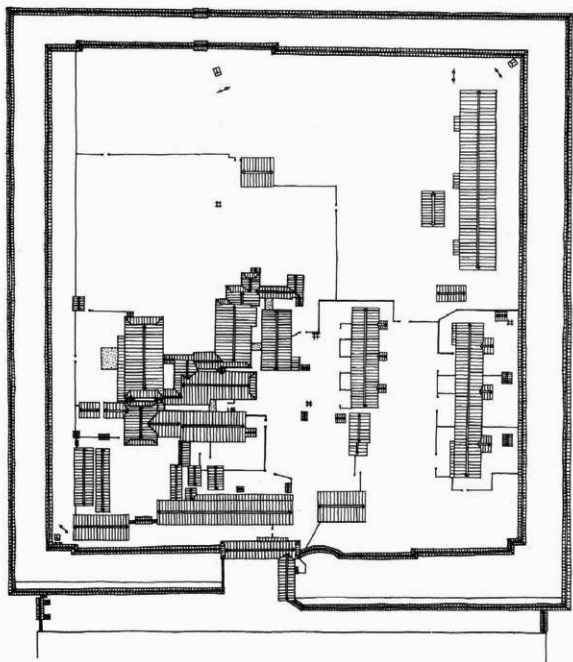
平城旧跡之圖 (北浦定政)
天理図書館藏

図版 8 南都御役所繪



南都御役所繪
文政三(1820)年刊
京都府立総合資料館蔵

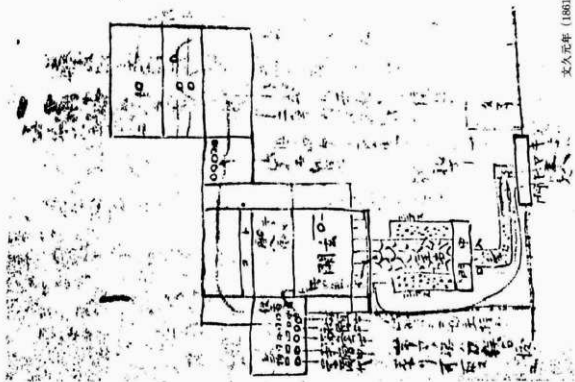
図版9 奈良奉行所建物配置復原図



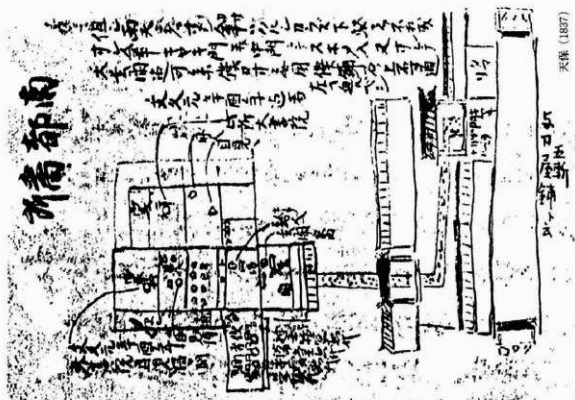
0 50m

图版10 奈良奉行所

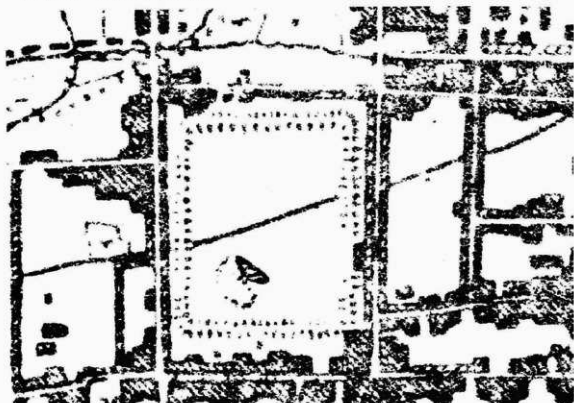
文久元年 (1861)



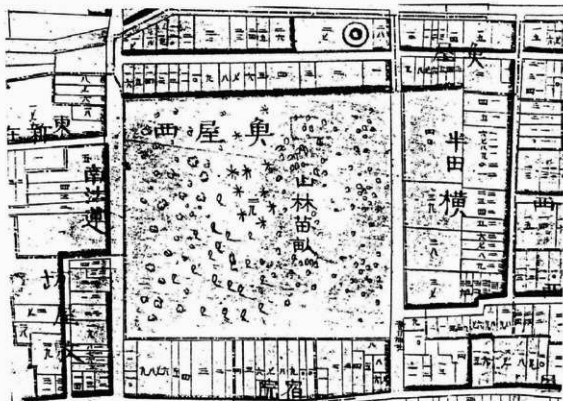
天保 (1837)



図版12 奈良奉行所跡

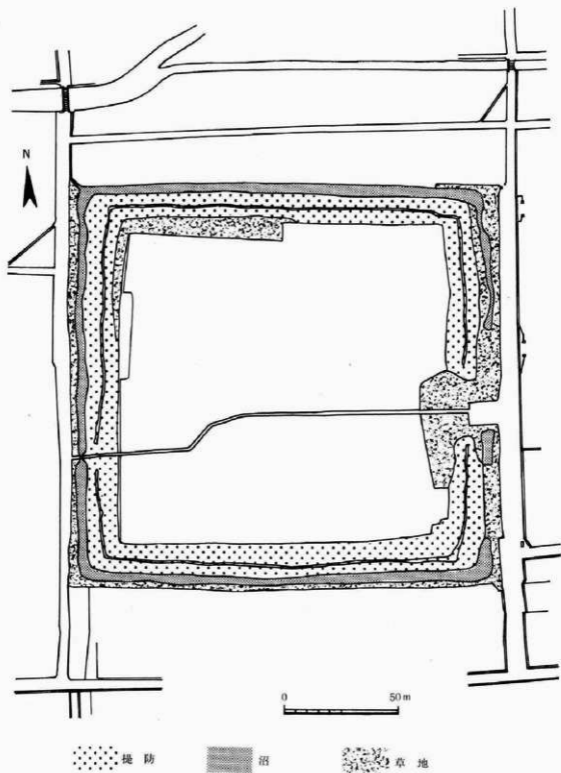


奈良陸測仮製図 (明治22年)



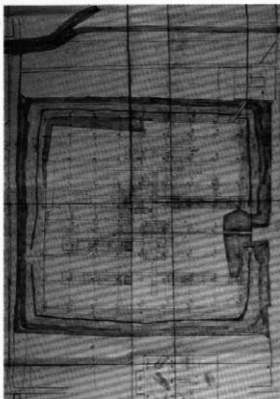
奈良町実測全図 (明治23年)

図版13 奈良奉行所跡

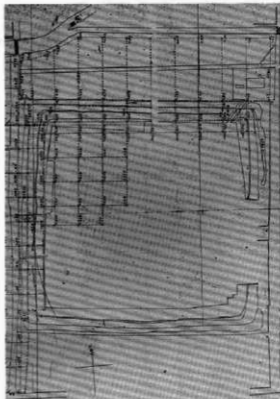


第貳女子高等師範学校敷地実測平面图

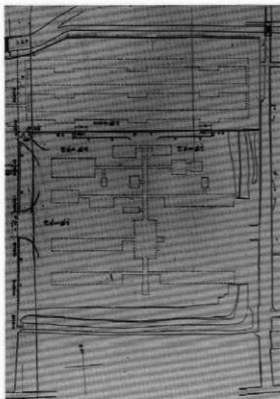
図版14 第貳女子高等師範学校敷地造成図



A. 敷地実測平面図



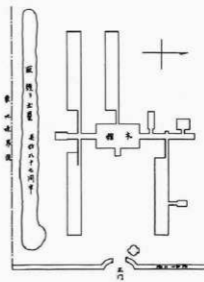
B. 敷地内臺部地均シ測量図



C. 敷地内堤防並排水工事平面図

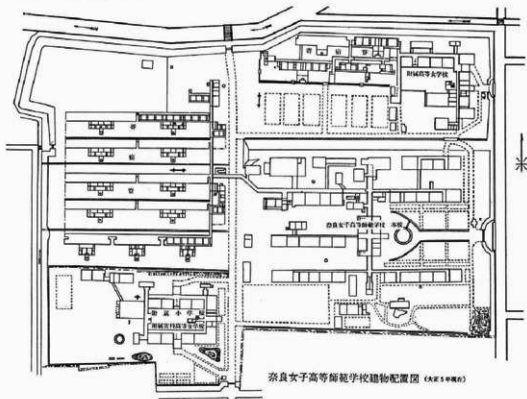
A—D 第貳女子高等師範学校
敷地造成

奈良女子大学蔵



D. 敷地南側土盛取壁位置の図

図版15奈良女子大学



奈良女子高等師範学校建物配置図 (大正5年)

奈良女子高等師範学校建物配置図 (大正5年)



奈良女子大学全景 (昭和40年頃) 『奈良女子大学六十年史』による

大学院・一般教養棟
予定地の調査

例 言

- 1 本書は昭和57年6月末日から8月末日にかけて行なわれた奈良市北魚屋西町奈良女子大学大学院・一般教養棟（F棟）予定地の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部（部長 岡田英男）の指導の下に奈良女子大学（学長 後藤和夫）が行ない、臨時文化財調査室調査員坪之内徹がこれにあたり、奈良国立文化財研究所文部技官上野邦一の指導を受けた。また本中真・深沢芳樹・伊藤裕久・住吉真弓・五十嵐久枝の協力を得た。
- 3 本書の作成には奈良女子大学助教授村田修三と坪之内が編集を担当し、本報告部分を担当した上野・坪之内のほか、各項の執筆責任者は文末に記した。
- 4 遺物整理全般にわたっては奈良女子大学卒業生島津良子の協力を得た。遺構と遺物写真の一部は八幡扶桑・佃幹雄が担当し、池田千賀枝の協力を得た。

凡 例

- 1 層位と遺構の位置は国土座標によって表示している。また、高さは絶対高をあらわす。
- 2 遺構の略号は奈良国立文化財研究所の方式に従った。また、遺構番号は平城京左京で検出した遺構に通し番号を与えていて、それを用いている。
- 3 土器の器種分類・軒瓦の型式は奈良国立文化財研究所で設定したものに準拠し、編年・時期区分は同研究所での成果を用いている。詳しくは「概報」Iを参照されたい。

目 次

I	調査の契機と経過	61
II	遺 構	62
	1 土層の状況	
	2 遺構と時期区分	
	3 まとめ	
III	遺 物	66
	1 土器	
	2 石製品・木製品・金属製品	
	3 瓦	

挿 図 図 1 SK2847出土遺物

図 2 各時期の井戸

図 版 第1図 発掘区遺構変遷図

第2図 発掘区東壁断面図

第3図 土器(1)

第4図 土器(2)

第5図 土器(3)

第6図 土器(4)

第7図 陶硯類・墨書土器

第8図 国産陶器・輸入磁器

第9図 埴輪・製塩土器

第10図 須恵質土器・石製品・木製品・金属製品

第11図 軒瓦

写 真 図版1 遺構全景

図版2 建物跡・井戸

図版3 井戸枠・柱根・土管

図版4 土器(1)(2)

図版5 土器(2)(3)(4)

図版6 陶硯類・墨書土器・国産陶器

図版7 輸入磁器

図版8 埴輪・製塩土器

図版9 輸入磁器・木製品

図版10 軒瓦

I 調査の契機と経過

奈良女子大学では昭和55年度に大学院博士（後期）課程が設置され、56年度には「比較文化学」と「生活環境学」の二専攻をもつ人間文化研究科が設けられた。このため、より専門的な研究を行なう施設の整備拡充が必要とされ、併せて学内に散在している一般教養の講義室不足を解消するという目的を兼ねて、長期計画に沿った大学院・一般教養棟の建設が計画された。

建設計画は昭和57年度に具体化し、また、場所は家政学部・理学部棟（A棟）と昭和56年度に竣工した家政学部・一般教養棟（E棟）にはさまれた南北に長い敷地約500㎡に決定していたが、当該地は奈良時代には平城京外京二条六坊11坪の一部にあたり、奈良時代の遺構の存在が予想され、隣接する家政学部・一般教養棟予定地の調査でも奈良～江戸時代に至る園池や中世の門跡が検出されている。また、宿院御所・奈良奉行所などの著名な遺跡が、文献・絵図などによって当大学構内に比定されていることもあり、校舎建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行なうことが必要とされた。

そこで、昭和57年4月、奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会は当該地の発掘調査を行なうことを決定し、同6月24日、臨時文化財調査室は奈良国立文化財研究所の指導の下に当該地の事前調査を開始したものである。

調査は発掘区北半部において後述する各時期の遺構面ごとに行なったため当初予想していたよりもやや多くの日程を要したが、8月中旬までに主要な遺構を検出し終わり、実測・埋め戻しなどを同月下旬に終えた。調査成果は後章に詳述するが、中世では東西4間以上・南北3間の総柱の掘立柱建物や豊富な輸入陶磁器、古代では条坊内の坪境小路に面した門や三彩小壺・三彩瓦・土馬などの遺構や遺物が主なものである。これらは従来よく知られていなかった奈良時代の外京地域とそれ以降の中世奈良町の人々の生活をうかがうに足る資料である。

調 査 日 程

57・6・24～27	機械による表土排除	57・8・7	現地説明会
7・6～15	遺構検出（中世後半）	9～10	遺構検出（古代）
16～20	写真撮影・平板実測	11	写真撮影
20～23	遺構検出（中世前半）	11～17	補足調査・平板実測
23～26	写真撮影・平板実測	19～21	土層図作成・遺構砂入れ
27～31	遺構検出（古代）	23～24	埋め戻し
8・2～5	豪雨のため中断		

II 遺構

1 土層の状況

発掘区の東壁（第2図）の観察から調査地の土層は、上から1、表土が2層・2、暗褐色土ないし茶灰褐色土・3、黄灰褐色粘質土ないし灰色砂質土・4、暗黄灰褐色粘質土・5、灰色砂質土であり、下からそれぞれ5、奈良時代・4、平安時代・3、鎌倉・室町時代・2、江戸時代・1、明治時代以降と考えられる。

発掘調査前の発掘区はほぼ中央で約1mの高低差があり、北は低かった。この高低差は自然地形ではなく、前身校舎を工事した際の土盛りの厚さが南北に異なることによる。表土2層のうち下層は幅15cm～20cmで南北に通る、ほぼ水平である。この下層は旧奈良女子高等師範学校の時期の土層で、この表土下層の上に南で1m40cm、北で40cmの新しい土盛りを行っている。今回の発掘調査で検出した遺構は3期に大別でき、A期 奈良時代・B期 平安時代・C期 鎌倉・室町時代以降で、検出遺構面は前述の3、4、5の土層に対応する。

発掘区は、もともとあった10号館建物の鉄筋コンクリート基礎を避けて設定したので、凸凹の多い複雑な形状をしている。この基礎のあたりから南東にかけては地山が高く発掘区の南と北とでは地山の高低差が約1mあり、南から北に向けて地山がさがっていく。したがって、発掘区はゆるい斜面に位置し発掘区北半部の谷部はなんども土盛りされて整地を行っている。

2 遺構と時期区分

検出したおもな遺構は掘立柱建物3棟、井戸6、溝6、土壇9以上、その他性格不明の土管列・小穴・石組みなどがある。これらの遺構の時期は奈良時代から現代までであり、層位・切り合い関係および出土遺物によって、A・B・Cの3時期に分けて報告する（第1図）。

A 期

南から北にさがる地山に対して谷部を埋めて整地している。ただし、埋土は質が良くなく灰色の砂質土で生活面としては条件が悪い。この時期の出土遺物の中には三彩小壺や三彩丸瓦があり、注目される。

SD 2842 この溝はSD2843に先行する斜行溝である。溝幅約1.5m・深さ15cmほどで、奈良時代中葉の遺物を多く含んでいた。墨書土器も含まれている。

SB 2840 一対の掘立柱穴で発掘区の東辺中央にある。柱間寸法は2.1m（7尺）の小さい門である。柱掘形は約80cmの方形で、北の柱穴には柱根が残っていたし、南の柱穴には柱痕跡が認められた。柱根は径35cmと木太く、北にやや傾いていた。発掘区は平城京二条六坊11坪にあたり、14坪との坪境小路に面しているので、門は坪境小路に開く。なお、北柱穴に接して西に柱痕跡を持つ柱穴を検出したが、この柱穴に関連する柱穴は検出されずSB2840に関連する

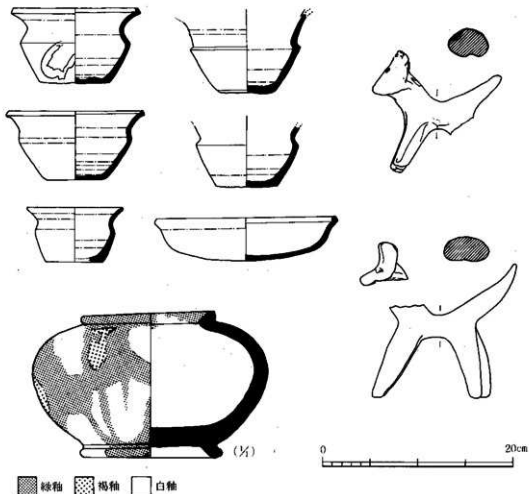


図1 SK 2847 出土遺物

ものかもしれない(図版3-2)。

SD 2843・SD 2890 SD2843はSB2840の北1mのところから北へ伸びる南北溝で、北ではSK2890と一体となっている。溝は幅80cm・深さ10cmほどであり、奈良時代の遺物を多く含んでいた。SK2890は方形状を呈するが、未発掘地に伸びていて性格はわからない。SD 2843と同様の埋土で深さも10cmほどであり、奈良時代の遺物を多く含む点などが似ている。

SD 2849 この溝は発掘区の北端にあるやや斜行する溝である。

SX 2851 瓦製土管を2個連ねたもので、給水・排水に使ったのであろうが、付近に関連する遺構がなく、性格は不明である(図版3-3)。

SK 2847 三彩の小壺や土馬(図1、原色図版2)を出土した土壌である。土壌というよりも浅い窪みに近く土馬などが集中していたことから、なんらかの祭祀を行った場所かもしれない。

B 期

A期の遺構が腐絶した後に暗黄灰褐色粘質土で整地している。A期の整地よりもよくなりました。生活面としては条件は良いと思われるが、遺構は少ない。

SE 2841 発掘区中央の西よりにある井戸である。井戸枠と井戸枠の底に曲物が残っていた。遺構面から井戸枠底までは82cm、曲物底までは115cmである。井戸掘形は2.2mの円形で、井戸枠は東西110cm・南北90cmの長方形である。井戸枠は高さ75cmほどが残っていたが、東側では南3分の2の堅板が、南では東4分の3の堅板が失われていた。井戸枠は、まず8cm×4.8cmの角材を組んで方形に据える。南北の材の両端に納をつくり東西の材をさしこむ。東西の材の上面隅で2.7cm角に欠いておき隅柱の納穴とする。6cm×3cmの角材を角柱として4隅に立て、土台から心々6.7cmの高さで6cm角の胴縁をいれて枠を固める。隅柱の外面に板を立て裏込に人頭大の河原石をいれて固定している。板は厚さ1.8cm、幅は残りの良いもので30cmである。堅板は南側・北側の板を隅柱よりすこし外に出し、東側・西側の板を南側・北側の板に突きあてている。曲物は井戸枠の中央やや北東より据えてあった。曲物は内法径が40cmで、高さが32cmである。この曲物は曲物本体の外に幅7cmほどの薄板をおさえの堅板とし、堅板の外を上端と下端で幅5cmの薄板を帯として巻き固定している（図2-1、図版2・3-1）

SE 2846 SE2841の北2mほどにある小さい井戸である。井戸掘形は直径1mほどの円形で、井戸の深さは遺構面から60cmである。井戸の底には、曲物が底部のみわずかに高さ3cm～4.5cm残っていた。曲物の直径は50cmで、厚さは0.3mmである。

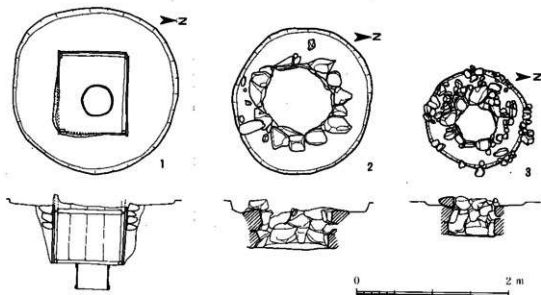


図2 各時期の井戸

1. SE2841

2. SE2859

3. SE2858

SK 2899 発掘区の中央東よりある土壌で、平安時代末期の遺物が出土した。

SK 2891 発掘区の北東にある土壌で、東壁にかかっておりさらに東の未発掘地へ広がっている。平安時代末期の遺物が出土した。

SD 2870 発掘区の北端にある東西溝で、平安時代末期以降の遺物が出土している。

C 期

今回の発掘調査で検出した上層の遺構であり、鎌倉時代から江戸時代の遺構があり、一部には明治時代の穴もある。鎌倉・室町時代の遺構が多い。C期の遺構検出面では輸入陶磁器の出土が多く、中世の遺構が多いことと合致している。また輸入陶磁器の出土が多いことは、この時期に居住した人物が輸入陶磁器を入手できるほどの階層であることを示している。

C1期

SB 2860 発掘区の北半部にある東西4間以上、南北3間の掘立柱建物である。身舎の規模が確定しないので、南北棟か東西棟かは不明である。いずれにしても、東の柱間1間通りは東庇と考えられる。柱間寸法にはややばらつきがあるが、身舎部は総柱で東西が1.8m～2m、南北が2.1m～2.6mであり、東庇は柱間3.1mである。柱掘形は50cm～30cmで小さい。検出した柱穴20のうち6ヶ所で柱根が残り、6ヶ所には柱痕跡が認められた。柱根を観察・実測すると、柱径は12cmで、1本は15cmと太い。断面は八角形に近いが柱の底部なので柱が丸柱なのか八角形なのかは確定できない(図版2)。

SK 2892 建物SB2860の南側柱の一つを壊す土壌である。鎌倉時代初期の遺物を出土した。

SK 2873・SK 2898 SK2873は発掘区中央東よりある土壌で、SK2898は発掘区の北西隅にある土壌で、ともに鎌倉時代後半の遺物を出土した。

C2期

室町時代の遺構がおもである。この時期の遺構は、発掘中央の東西溝SD2875を境として南では少なく北では多い。

SE 2889 発掘区の南端中央にある長方形の深い穴で、おそらく井戸であったろう。

SA 2847・SA 2875 A・B 発掘区中央にある掘立柱の東西塀である。2つの塀は溝SD2875を挟んで南北にあり、この溝を境界とする南と北の区画を示す塀であろう。小さい柱穴であることや、柱間寸法がばらつくことも共通する。なお、SA2872は隣接して2本あり、塀が建て替えられている。

SD 2875 東西塀SA2857・SA2872の間にある東西溝で地割を示す溝であろう。室町時代の遺物を出土した。

SK 2893・SK 2901 発掘区中央の東よりある土壌で、室町時代中頃の遺物を出土した。この土壌の北と西には円形・長円形の土壌を多く検出した。

SX 2877・SA 2886・SA 2887・SD 2878 土壌SK2893・SK2901の北にある。

SX2877はし字形の石列で、一部では並列しているように観察でき、溝の両側の縁石の可能性もある。SA2886・SA2887は1間ないしは2間の掘立柱南北塼で、石列の西1m～1.5mにある。SD2878は幅30cmの浅い南北溝で、この溝はSX2877の北1.5mのところまで検出した。SD2878の南に延長すれば、石列SX2877の西端に合致し、両者は一連の溝かもしれない。この区画に集中している石列・掘立柱塼・溝は関連しあう遺構の可能性はある。

SB 2896 発掘区北辺にある2間×2間の掘立柱建物である。2間の総長は南北・東西ともに4mであるが、1間の柱間寸法にはばらつきがある。また、正しい方形をなさず、すこし歪んでいる。のちの土壌SK2897によって切られていて、柱穴が壊されていると考えられるので、総柱の建物であったかもしれない。

SK 2897 建物SB2896に重複する長方形の土壌で、建物よりも新しい。室町時代後半の時期の遺物を出土した。

SE 2880 発掘区西壁の中央付近にある瓦積の井戸である。西半分は未発掘地にあり全体の形状は確定できないが、井戸の内径は60cmほどであろう。

C3期

SE 2858・SE 2859 発掘区中央に並ぶようにある2つの石組井戸であり、江戸時代のもと考えられる。東の井戸SE2858は内径50cmで、石組みは3段50cmほどが残っていた。西の井戸SE2859は内径90cmで、石組みは2段～3段50cmほどが残っていた(図2-2・3、図版2)。

3 まとめ

この調査地区は奈良時代から現代までの遺構があり、人々の生活が営まれてきたことが明らかになった。奈良時代の遺構では、平城京象坊による坪境小路を想定させる門が目される。室町時代には、この一帯に地割が存在し、相当の身分の人物が邸宅を構えたことが推定できるのは貴重である。

(上野邦一)

III 遺物

出土遺物は土器・瓦が多数を占め、その他に木製品・石製品・金属製品がある。古墳時代から江戸時代にまで及んでいるが、奈良から室町にかけてのものが中心である。

1 土器

土器は土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器等であり、今回は製塩土器・埴輪片が若干認められる。

SD 2842 出土土器(第3図1～11、図版4) 須恵器杯A(1)・皿B(2)、土師器杯

B(3)・皿A(4・5)・高杯(6)・皿B(7)・甕A(8)・甕(9・10)・壺A(11)がある。須恵器杯Aの復原口径は15.7cm、高さ3.8cmで、底部と体部の境界が明瞭な角度をもたない。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。また、土師器碗・皿・高杯は内面の放射状暗文が一段だけである。これらは平城宮Ⅲの土器の特徴である。(10)の甕Ⅳは平城宮Ⅲの代表であるSK820出土土器よりやや新しいとされるSK2101出土土器中に見られる。このほかに墨書土器(第7図3)が出土している。内底面に輪状暗文が施された土師器杯Aでやはり平城宮Ⅲに属するものである。

SD 2849 出土土器(第3図12~22、図版4) 須恵器杯A(12)・杯B(13~17)・皿B(18)・壺E(19)・杯B蓋(20)、土師器盤B(21・22)が出土している。(16)の底部外面にはヘラで×字状の記号が印されている。(14)は底部外面にヘラ切り痕跡を残す。(20)は内面を利用した転用碗である。(19)の壺のようにやや古い様相をもつものがあるが、大型盤の存在などから、平城宮Ⅴ~Ⅵ(奈良時代末~平安時代初頭)に位置づけられよう。

SE 2841 出土土器(第4図1~13、図版4) (1・2)は井戸堀形内の出土、他は井戸埋土出土である。瓦器碗(1)は復原口径14.0cm、高さ5.9cm、高台径5.4cm、高台は外側に張り出している。内底面には連続した平行線文が施され、内面のヘラ磨きも密であるが、外面はやや疎らになっている。瓦器皿(4・5)はどちらも内底面に連続した平行線文が施されているが、(5)は口縁部内面に細かなヘラ磨きが施されている。土師器皿は口径15.0cmのもの(6)と10.0~10.5cmのもの(7~12)に分けられる。後者のうちやや口径の小さい(7)は口縁端部をナデで強く外反させる前代からのいわゆる「て」字手法を残している。いずれも胎土には金雲母細片と赤色クサリ礫を含み、色調は明褐色を呈す。土師器土釜(13)は胎土に白色砂粒・赤色クサリ礫を含み、焼成は軟弱でもろく、色調は暗灰褐色を呈し、外面にはススが附着している。瓦器・土師器皿の型式から、これらの遺物の年代は12世紀中葉~後半に位置づけられよう。

SK 2892 出土土器(第4図14~25、図版4) 瓦器碗(1・2)は口径14.5cmと14.0cm、高さ5.0cmで高台はかなり低くなっている。内底面には渦巻状暗文が施され、内面のヘラ磨きはやや疎らになっている。土師器皿は復原口径13.5cm前後のもの(16・17)と10.0~10.5cmのもの(18~23)に分けられる。これらのなかで(16~22)は胎土に白色砂粒・赤色クサリ礫を含み、色調は淡赤褐色を呈するが、(23)は胎土に赤色クサリ礫を含まず、色調は灰白褐色を呈している。(24・25)は灰釉系陶器(常滑焼)甕である。(24)は口縁端部の接合痕跡を残し、肩部と口縁部内面に暗緑色の自然釉が見られる。(25)は口縁端部を強くナデで引き出している。やはり瓦器と土師器皿の型式から12世紀末~13世紀初頭に位置づけられよう。

SK 2891 出土土器(第4図26~41、図版5) 瓦器碗(26~29)は口径13.5cm前後、高さ4.5~5.0cmとやや小さくなり、器形の垂みが目立つようになる。高台の貼付け痕跡も明瞭である。内底面の渦巻状暗文も粗略になるが、内面のヘラ磨きからは独立している。外面の暗文

は粗なものと密なものがあるが、口縁部付近に集中するようになる。瓦器小碗(30)は普通の碗に比べて造りは丁寧である。復原口径8.0cm、高さ2.8cm。瓦器鉢(31)は碗に通有に見られる口縁部内側の沈線が施されていない。口径14.5cm、高さ4.3cm。土師器皿は口径14.0cm前後のもの(32~35)と口径9.5~10.0cmのもの(36~39)に分けられる。前者は口縁部に2度以上の横ナデを内外面同時に行っている。いずれも胎土に白色砂粒・赤色クサリ礫を含み、灰褐色または灰赤褐色を呈する。土師器土釜(40)は砂粒の含有が多く、色調は暗赤褐色を呈し、内外面ともにスガが付着する。(41)の土師器土釜は内彎気味にはぼまっすぐ収まる口縁に水平な跨が付き、大和に通有に見られる形態でない。瓦器碗の法量の縮小化という事実からすれば、これらの土器は13世紀前半~中葉に位置づけられよう。

SK 2873 出土土器(第5図1~23、図版5) 瓦器碗(1~7)は口径が12.5cm前後のものから13.5cm前後のものまであり、高さも4.0~4.5cmと、法量が規面性に欠ける要素が多くなってくる。高台の貼付け痕跡も明瞭で、機能を果たしていないものも多く、器の中心に位置していないものがある。内底面の渦巻状暗文もさらに粗略になり、そのまま内面の暗文に続いているものが多い。瓦器小碗(8)は内底面に接続した平行線状暗文が施され、内面の暗文も比較的密であるが、外面には暗文は見られない。口径8.8cm、高さ3.1cm。瓦器皿(9・10)は口径8.4cm、高さ1.4~1.6cmと通有の瓦器皿よりも小さく、内底面に十字状にジグザグ状暗文が施されている特異なものである。(11)は瓦器の長方形盤状容器で、27.2cm×18.4cm×5.6cm(高さ)の浅い箱状の器に鉄頭円錐形の脚が4本付けられている。全的にやや粗くて幅の広いヘラ磨きが施されている。土師器皿は口径14.0cm前後のもの(12~16)と9.5~10.0cmのもの(18~23)に分けられる。前者では口縁部を強くナデたものが多くなり、底部の境界に明瞭な段をもつものが目立つようになる。いずれも胎土に金雲母片・赤色クサリ礫を含み、色調は明赤褐色または淡赤褐色を呈するが、(17・23)は砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、色調は灰白色を呈する白土器系統である。SK2891出土土器と比べても、瓦器碗の規面性の欠如、暗文手法の退化、土師器皿の形態の変化が進行していることなどから、これらの土器は13世紀後半に位置づけられよう。

SK 2861 出土土器(第5図24~43、図版5) 土師器皿のみが出土している。(24~35)は胎土に白色砂粒・金雲母細片・赤色クサリ礫を含み、色調は赤褐色または暗赤褐色を呈する赤土器系統で、(36~43)は胎土に細かいチャート片や白色砂粒を僅かに含み、色調は灰白色または黄灰白色を呈する白土器系統である。前者は口径が10.0~10.5cmのもの(24~29)と8.0~8.5cmのもの(30~35)に分けられ、後者は口径が10cm前後のもの(36~40)と7.5cm前後のもの(41~43)に分けられる。赤土器系統の口径が大きい皿では、口縁部外面のナデの範囲がかなり狭くなっているのが特徴である。この土壌では外区に珠文をめぐらせた花文軒丸瓦の断片(第11図7)が出土しているが、これに近い文様構成のものが平安京左京八条三坊のSX2で出土しており、遺構の時期が層位関係から14~15世紀と推定されているところから、これ

らの土器もほぼ同じ時期に属するものとして大過ないであろう。

SK 2893 出土土器 (第6図1~9) 土師器皿(1~16)は基本的にはSK2861出土のものと同じであるが白土器系統で口径が12.5cm前後のもの(13・14)と14.5cm前後のもの(15・16)とが増えている。(8)はやや時期の上のものであろう。(1~8)は胎土に白色砂粒・チャート片を含み、色調は赤褐色または淡赤褐色を呈す。(9~16)はチャート片等を含むが精良な胎土で、色調は灰白色または灰白褐色を呈す。土師器土釜(17)は胎土にチャート片をはじめとする細かい砂粒を多く含み、色調は黄灰白色を呈する。瓦質火鉢(18・19)は口縁部と底部を残すのみであるが同一個体であろう。

SD 2875 出土土器 (第6図20~24) 土師器皿は口径7.5~8.0cmのもの(20・21)と12.0~13.0cmのもの(22~24)に分けられる。器壁が薄くなっていることが特徴である。(20)は胎土に赤色クサリ礫を含み、色調が淡灰赤褐色を呈する赤土器系統であるが、(21~24)は精良な胎土で、色調は淡褐色または灰白褐色を呈する白土器系統である。土師器皿のみで時期を限定できる資料に乏しいが、構内遺跡SK2312出土の土師器皿のなかに形態や法量が共通するものがあり、16世紀前半以降に比定される。

SE 2889 出土土器 (第6図25~28、図版5) 土師器皿(25・26)はいずれも精良な胎土で、色調は淡灰褐色を呈す。(26)は口径19.3cm。(27)は中国製輸入磁器で明代の青磁碗である。釉色は緑灰褐色を呈し、高台内面には施釉されていない。(28)は平面楕円形の浅い筒状部に三脚がつく瓦質容器である。外面は横方向のやや粗いへら磨きのあと、タテ方向の細かいへら磨きが施されている。これもやはり時期を限定できる資料を欠いているが、この種の青磁碗のわが国での流通期間を考えれば16世紀前半以降とすることができよう。

SE 2880 出土土器 (第6図29~32) (29)は瓦質播鉢で、外面に縦方向の粗いハケ目が時計逆回り方向に施されている。(30)は美濃系の茶碗で口縁外面と内面全体に淡黄緑色の釉を施し、内面に窯道具のあとを残す。土師器皿(31)は精良な胎土で、色調は灰褐色を呈す。口径18.6cm。(32)は信楽焼播り鉢である。播り目部分は残存していない。内面は使用による磨耗が著しい。色調は淡赤褐色を呈している。信楽焼播鉢の色調より、これらの遺物は16世紀中葉以降に位置づけられよう。

SK 2897 出土土器 (第6図33~45) 土師器皿は口径が7.0cm前後のもの(33・34)、8.5cm前後のもの(35・36)、10.0cmのもの(37~39)、10.5cm前後のもの(40)、14.5cm前後のもの(41・42)がある。これら以外にやや深い鉢状の形態を呈するもの(43・44)があるが、系統は明らかでない。(34~36)は胎土に金雲母細片・赤色クサリ礫を含み、色調は明赤褐色または暗赤褐色を呈する赤土器系統であるが、(33)・(37~44)は胎土に白色砂粒やチャート片を僅かに含み、色調は灰褐色を呈する白土器系統である。瓦質播鉢(45)は外面に指頭痕を残す。内面は使用による磨耗が著しい。

陶製硯 (第7図1・2、図版6) 台付円面硯(1)は円い台をそなえた圓足硯であるが、

透孔の上端以下の台部を欠いている。陸は海より少し高く、周囲に断面三角形の低い内堤をめぐらせている。(2)は鏡面硯と呼ばれているものである。須恵器の甕または壺の内面の同心円文の凹凸を利用して硯面としている。全体の3分の1ほどを欠いているが、平面は隅丸梯形であったと考えられる。周縁は焼成後の打ち欠きによるもので、手ずれによる磨滅が認められる。

墨書土器(第7図3~11、図版6) 中世のものも若干認められるが、大部分が奈良時代であり、そのほとんどが須恵器である。ここでは奈良時代のもを紹介する。

- (3) 「本漬」 SD2842出土。土師器杯Aの底部外面。
- (4) 「廿」「廿」 SD2849出土。須恵器杯B蓋内面の周縁近くの対称の位置。
- (5) 「」 SD2849出土。須恵器杯B底部外面の高台寄り。旁部がない。
- (6) 「^(和)」 SD2890出土。須恵器杯B底部外面の高台寄り。あるいは旁部だけか。
- (7) 「紀□」 SK2890出土。須恵器皿Aの底部外面中央。人名であろう。
- (8) 「麻」 須恵器壺の底部外面。
- (9) 「大宅」 須恵器皿Cの底部外面中央。
- (10) 「富」 SD2843出土。須恵器蓋のつまみ中央。
- (11) 「家」 須恵器蓋内面の周縁近く。

このほか「上用」「家」と書かれた断片が出土している。いずれも須恵器である。

國産陶器(第8図1~8、図版6) (1~4)は灰釉陶器である。(1・2)は皿、(4)は碗であろう。(4)の序部外面にはX字状の記号が墨書されている。(5~8)は緑釉陶器である。(5)は蓋、(6)は皿、(7・8)は碗である。いずれも全面に施釉されている。

中國製輸入磁器(第8図9~36、図版7・9) (9~25)は白磁碗で、(9~12)は大宰府白磁碗Ⅴ類(内底面の軸を輪状にカキ取ったもの)に属する。(9・10)はⅤ-2の口縁部である。(13・14)はⅡ-1(小さい玉縁口縁、内底面に段がない)、(15~20)はⅣ-1・a(玉縁口縁、内底面に沈線状の段)に属する。(21~25)はⅤ類(高く直立した高台、口縁部外反)で(22・23・25)はⅤ-4・a(内底面に沈線状の段)である。(26~29)は白磁皿である。(26)は口径が大きく、内底面に荷花(蓮の花)文様がへら描きされている。底部外面中央はクロ回転によって軸をカキ取っている。口縁部外面直下には軸だまりが見られる。

(27・28)は大宰府白磁Ⅵ-1・a(上げ底状の底部、口縁部内彎)に属する。(30)は白磁小壺(合子)である。胴部外面下半から底部にかけては施釉されていない。(31)は青白磁水注の底部と考えられる。高台内面と畳付部分が露胎である。(32~35)は青磁碗である。(32)は大宰府龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・c(外面鑄蓮弁文、内底面スタンプ文様)に属する。(34・35)はやや口径の小さいもので、内面に花文を片彫りしている。外面には文様はない。いずれも高台内面と畳付部分は露胎である。(36)は同安溪系青磁Ⅲ-1・b(内面にへらによる片彫り、櫛によるジグザグ文様、底部無施釉)に属する。

埴輪片(第9図1~6、図版8) 発掘区南寄りの包含層4からまとまって出土している。

形象埴輪の断片も見られるが、大部分は円筒埴輪である。(1・2)は口縁部で、(2)は外面は縦ハケ1次調整のあとB種横ハケによる2次調整が行なわれている。内面にも同種の横ハケが施されている。(3・4)は中段のタガ部分で、(3)はタガ以下の外面は指による縦方向のナデが施されており、基底部と考えられる。(4)は外面にB種横ハケによる2次調整が施されている。焼成は堅緻で、色調は暗灰褐色を呈する。(5・6)は基底部で(5)は外面に粗いB種横ハケが施されている。底面はワラ圧痕をへらで調整している。(6)は粗い縦ハケによる1次調整のあとやや細かい縦ハケによる2次調整が下から上に向かって施されている。底面にはワラ圧痕を残したままである。

製埴土器(第9図7~13、図版8) いずれも厚手で砂粒を多く含み、暗赤褐色または黄灰褐色を呈する奈良時代以降のものである。(7)は粘土帯の巻上げ成形痕跡を残し、(9)は内面に細かい布目を残す。布目は瓦のものくらい粗いものもあるが、ここでは図示していない。

その他の土器(第10図1・2) 奈良時代の土器器蓋では内面に同心円叩きの見られるものがある。中世の土器器では底部外面に糸切り痕を残した皿が認められるが、時期を確定できる資料にめぐまれている。須恵器および須恵器系陶器では常滑や信楽のものが目立つが、讃岐産と考えられる壺(1・2)も存在する。中国製陶器では褐釉の壺が2点認められ、1点は肩部および底部外面に波状の沈線が施されているが、全体の形状は明らかにできない。瓦器では短かい脚のついた大型火鉢が3個体以上知られるが、図化することはできなかった。

2 石製品・木製品・金属製品(第10図3~11、図版9)

石製硯(3) やや軟質の緑灰色を呈する片岩系の石で造られている。包含層中の出土で年代は明らかにできないが、中世後半に多く見られる小型硯の特徴を有している。

木製椀(4) 復原口径18.5cm、高さ6.0cm。平底で幅広い高台をもつ。内外面ともに黒色の漆が施されているが、文様は認められない。SK2853からの出土で、瓦器や土器器皿の細片が共伴している。

塔婆形木製品(5) 高さ17.2cm、基底幅16.2cm。五輪塔の空輪をやや厚めの板で造り出した形態をしている。両面に梵字が墨書されていたが、片面は剥落してしまっただけで判読不可能である。

鳥羽形木製品(6) 厚さ0.15~0.2cmの薄い板を加工して造られ、ややたわみを生じている。SK2861出土で、中世後半のものであるが、用途は不明。

銭貨(7~11) 和同開珎(7)は他に断片が1点出土している。開元通宝(8)は銅質・銹上りともに極めて悪い。(9)は祥符元宝(1008年初鑄)、(10)は元豊通宝(1078年初鑄)、(11)は政和通宝(1111年初鑄)で、ともに北宋銭である。

3 瓦(第11図、図版10)

瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦が出土しており、三彩瓦(原色図版2)、中世

の刻文瓦も見られる。ここでは軒瓦にだけ説明を加える。

八弁複弁蓮華文軒丸瓦(1) 玉縁部分まではほぼ完形で残存している。瓦当文様は中房の蓮子が1+6、外区の珠文が23、周縁の線鋸歯文は20である。平城宮6285-Bの文様構成をもつ。

四弁複弁蓮華文軒丸瓦(2) 瓦当径15cm以下の、いわゆる小型瓦である。中房の蓮子は1個だけで、外区は珠文、周縁は線鋸歯文であるが、数は不明である。平城宮6313型式に属する。

重圏文軒丸瓦(3) 圏線は断面が高く輪郭もはっきりしており、周縁も比較的高い。

八弁複弁蓮華文軒丸瓦(4) 瓦当文様は全体に平面的で、中房が大きい。磨滅のために蓮子数は不明。外区の珠文の数も不明で、周縁の文様の有無は明らかでない。

興福寺銘軒丸瓦(5) 内区の主文は削り取られてほとんど読み取れないが、拓本や類似の瓦との照合によって「興」、「福」、「寺」と考えられる。周縁は高く幅広い面をなしている。

蓮華文軒丸瓦(6) SK2874出土。先端が尖り気味の単弁を弁間に配し、これらを一括して界線で囲っている。中房の外周には芯がめぐる。

花文軒丸瓦(7) 周縁は高く幅広い面をなす。胎土・焼成・色調からみて(15)の蓮珠文軒平瓦とセットをなす可能性が高い。

均整唐草文軒平瓦(8) 中心飾りの左半分と唐草文の左側第1単位だけ残している。外区は上下とも珠文である。平城宮6664型式に属するが、細分は不明である。

均整唐草文軒平瓦(9) 瓦当文様の左端部だけ残存。脇区と上外区との間に界線がみられる。

均整唐草文軒平瓦(10) 中心飾りを欠いているが、左側の唐草文2単位分を残す。外区の珠文はやや大きく疎らだが、規則的に配されている。東大寺式軒瓦と呼ばれているものである。

唐草文軒平瓦(11) 左から右に流れる唐草文だけが残存している。周縁はやや高く、平坦な面をなしている。

唐草文軒平瓦(12) 樹枝状に変化した唐草文であり、単位表現はもはや明らかでない。

唐草文軒平瓦(13) 渦巻状に変化した唐草文で、かなり小型の瓦である。

均整唐草文軒平瓦(14) 波溝状に変化した唐草文の中心部分と右側の3単位を残している。周縁は高く、顎は浅くなっている。

蓮珠文軒平瓦(15) 内区の左端に界線をもたない。やはり高く平坦な周縁と浅い顎をもっている。

(坪之内蔵)

あとがき

先のE棟（家政学部・一般教養棟）の建設予定地発掘調査にひきつづき、講堂及びF棟（大学院・一般教養棟）の発掘調査が行なわれて相当の時間が経過しました。

この度、講堂・F棟の調査成果に関する概報発刊に至りました経過に、関係者各位から多大の御協力を頂いた次第に何よりも謝意を表したいと思えます。

いうまでもなく、講堂の建築につきましては旧講堂（現資料館）の考朽化などによる使用の制限以来、本学の重要な行事である入学式、卒業式でさえも学内で挙行できなかった遺憾を解消するものとして、鶴首の思いで待たれて来た所であります。

またF棟は本学に博士課程大学院が設置されて今日まで、この人間文化研究科を女子研学の最高機関として名実ともなわしめる不可欠な建築と考えられ、全学的な対応を求められて参りました。

その結果、発掘調査につきましては本学の内外、特に奈良国立文化財研究所を始めとする関係諸機関、からの格別な御配慮を頂きまして、現在すでに両建築ともに落成し、この概報が発行される時点では供用の段階にある次第など、本学関係の各位には周知の通りと存じます。

発掘調査の成果それ自体につきましては、すでに本文中に詳述されておりますので、ここには重ねての記述をしません、それが関係する研究分野に寄与する所の大きいことは多言を要しない次第であります。

古都「奈良」において研究・教育を通じ社会に貢献する使命の下にある本学として、調査の成果を世に問うことは社会の期待に対応するひとつと思われまふ。

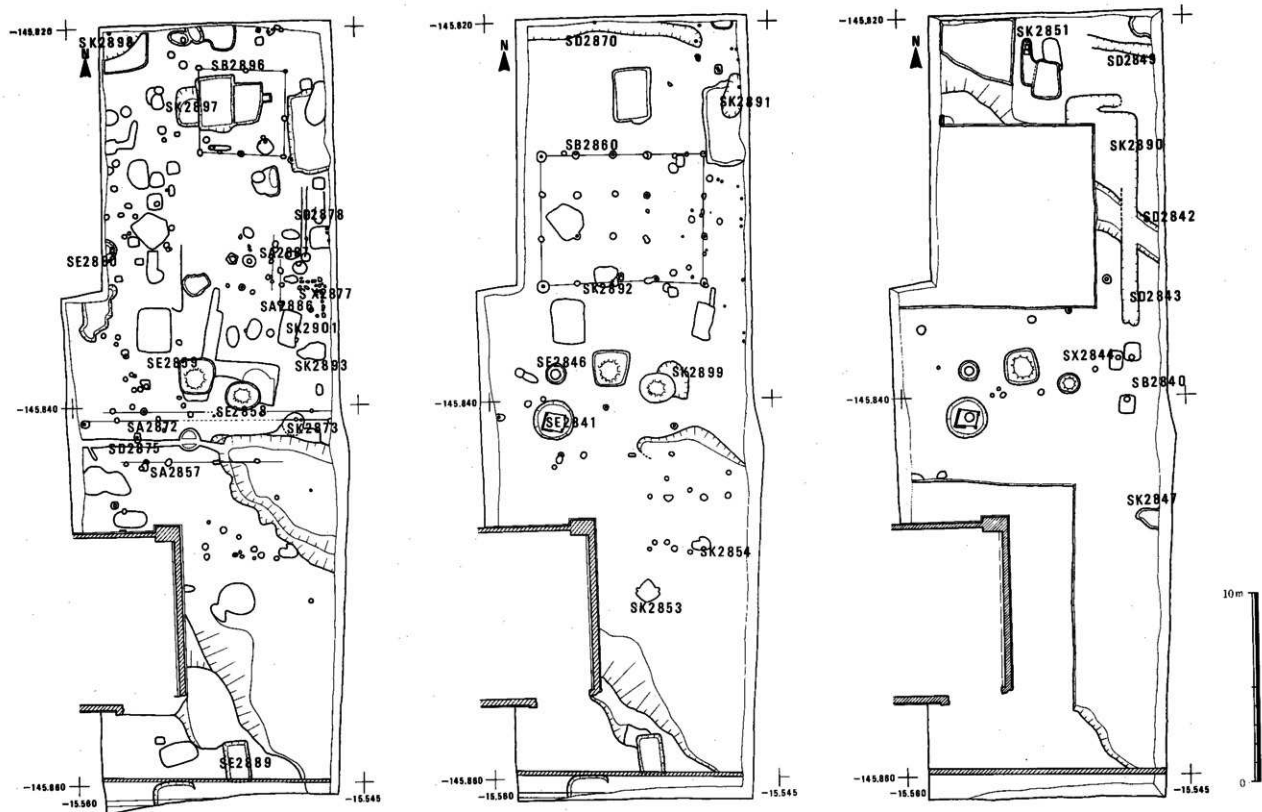
そして、今後の大学整備と共に、構内遺跡に対する調査研究もさらに推進され、その成果が解明されることは、実に、本学が当面する課題に数えられる所であり、今後の調査活動にも関係者各位から一層の御理解と御協力を切望する次第であります。

終りに重ねて、この奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報（Ⅱ）に与えられました御援助・御鞭達に御礼を申し上げ「あとがき」の結びとさせていただきます。

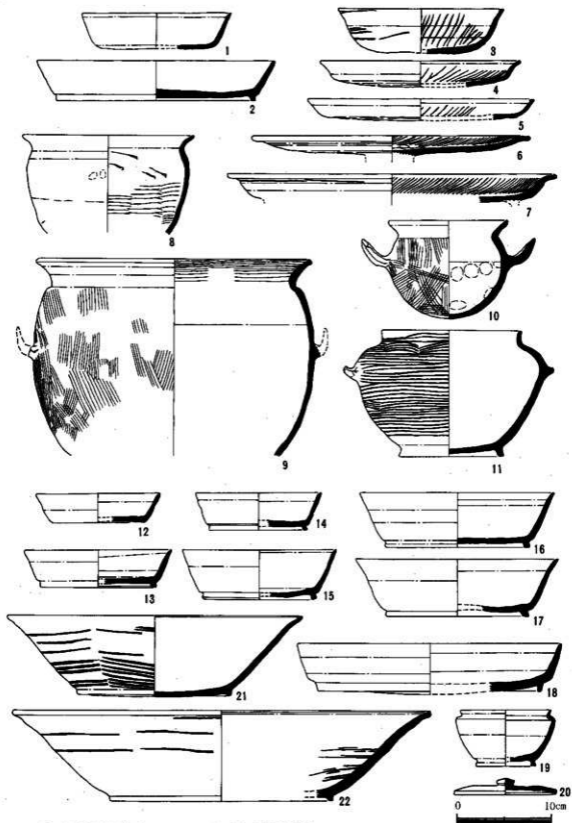
昭和59年3月

発掘調査委員長 近藤 公夫

第1図 発掘区遺構変遷図



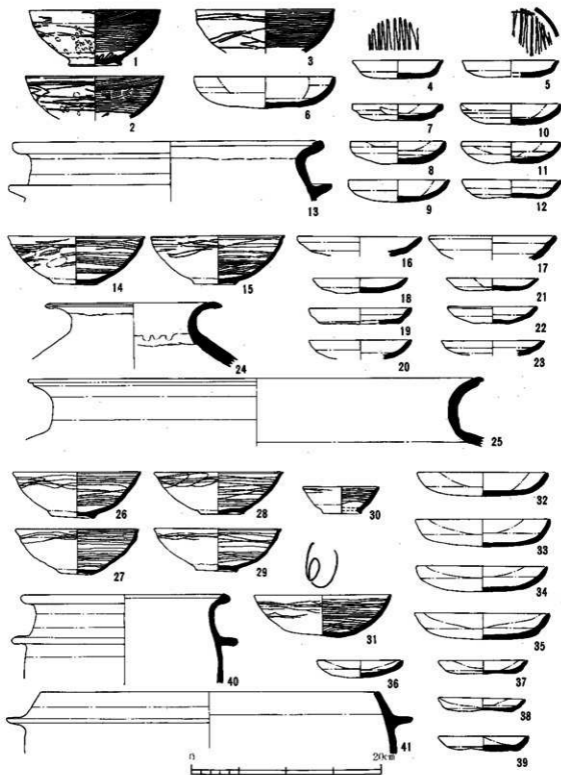
第3圖 土 器(1)



1~11 SD2842出土:

12~20 SD2849出土:

第4図 土 器(2)

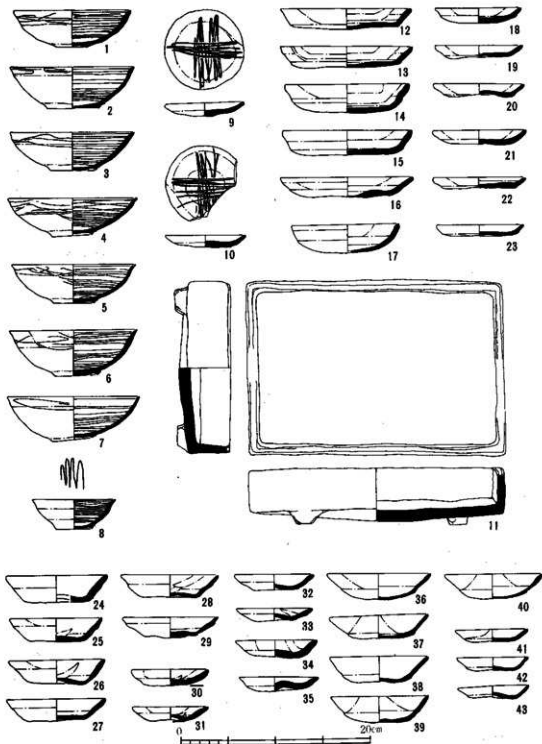


1~13 SE2841出土

14~25 SK2892出土

26~41 SK2891出土

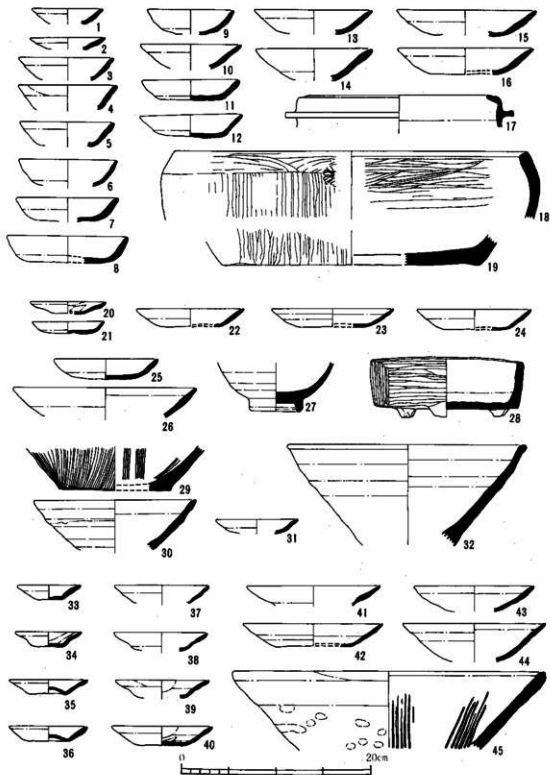
第5图 土 器(3)



1~23 SK2873出土.

24~43 SK2861出土.

第6図 土 器(4)

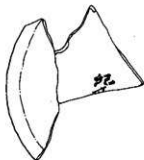
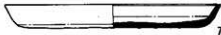
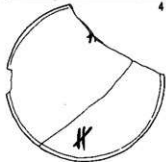
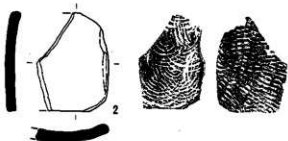
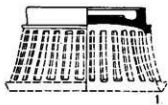


1~19 SK2893出土
29~32 SE2880出土

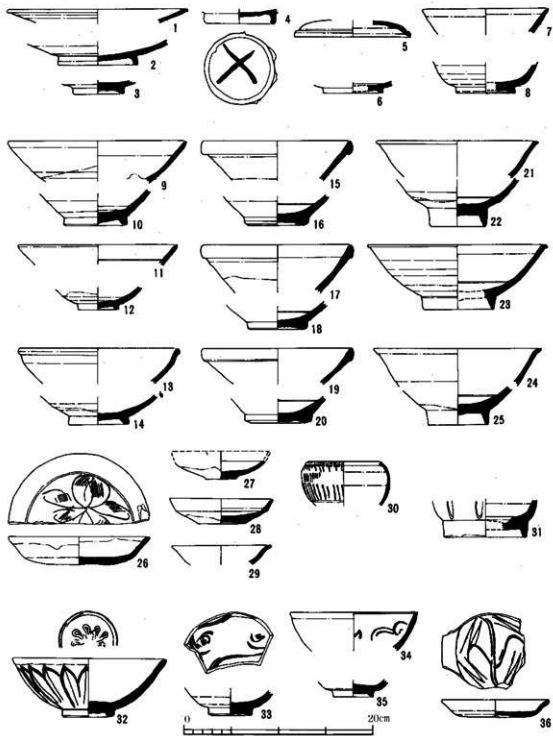
20~24 SD2875出土
33~45 SK2897出土

25~28 SE2889出土

第7図 陶硯類・墨書土器

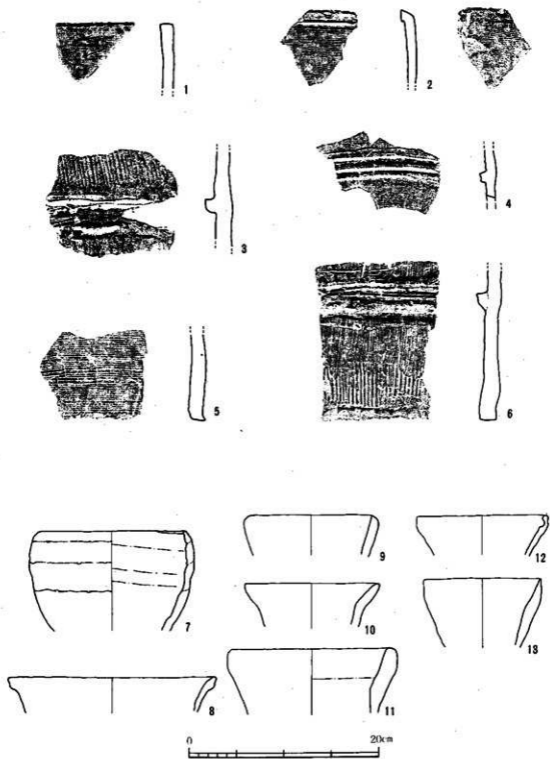


第8図 国産陶器・輸入磁器

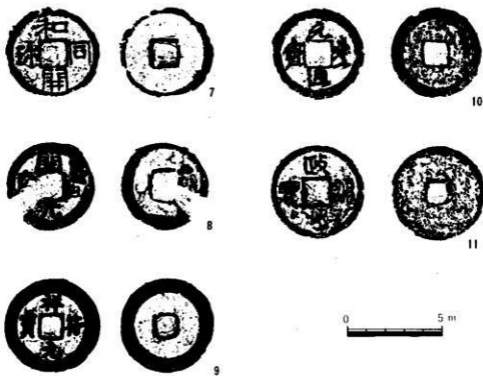
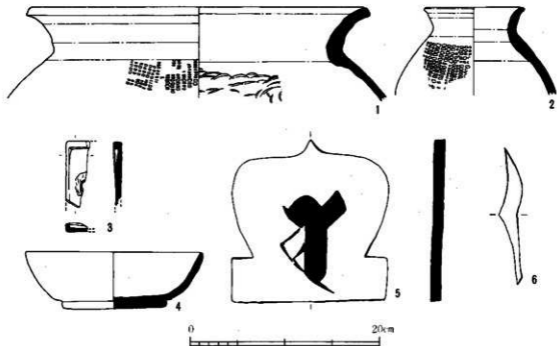


1-4 灰釉陶器 5-8 緑釉陶器 9-30 白磁 31 青白磁 32-36 青磁

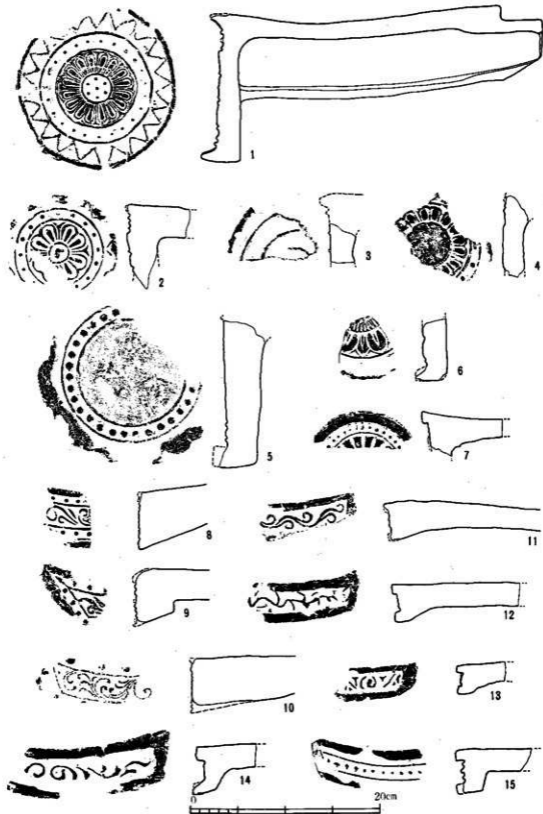
第9図 埴輪・製塩土器



第10図 須恵質土器・石製品・木製品・金属製品



第11圖 軒 瓦



図版1 遺構全景



C 期

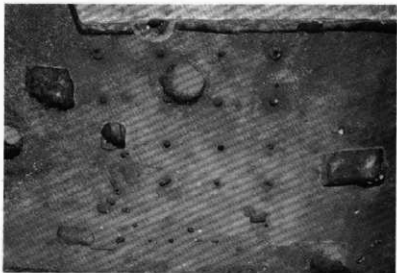


B 期



A 期

図版2 建物跡・井戸



SB2860

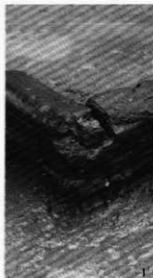


SE2841



井戸群

図版3 井戸枠・柱根・土管



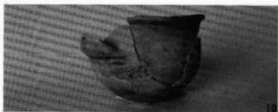
1. SE2841

2. SB2840

3. SX2851

图版4 土 器(1)(2)

SD2842出土土器



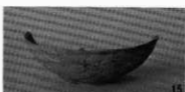
SD2849出土土器



SE2841出土土器

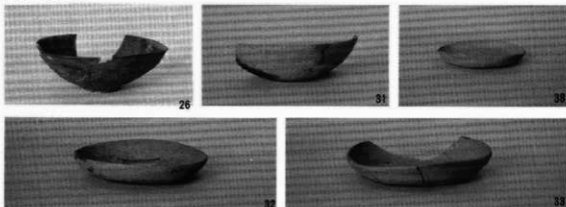


SK2892出土土器

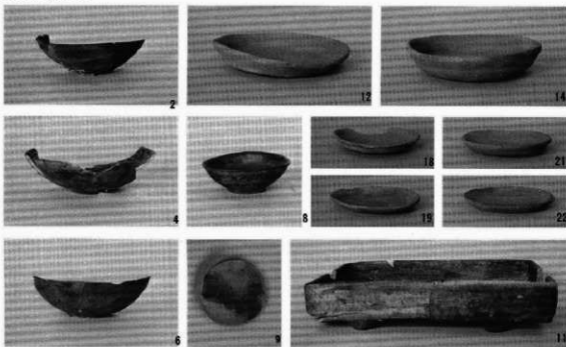


図版5 土器(2)(3)(4)

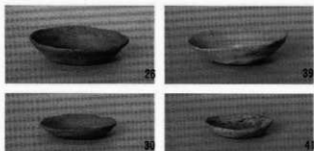
SK2891出土土器



SK2873出土土器



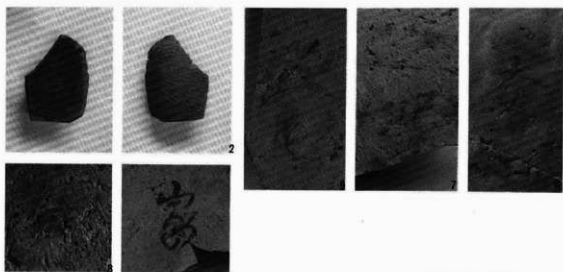
SK2861出土土器



SE2889出土土器

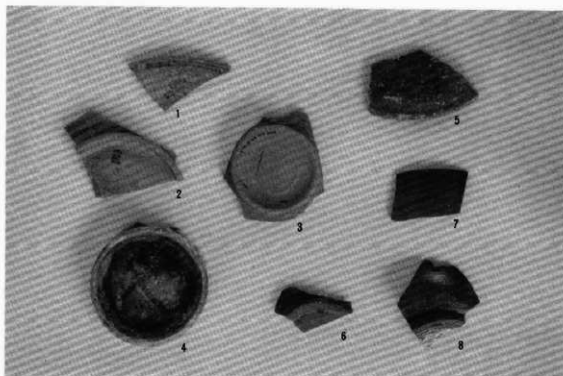


図版6 陶硯類・墨書土器・国産陶器

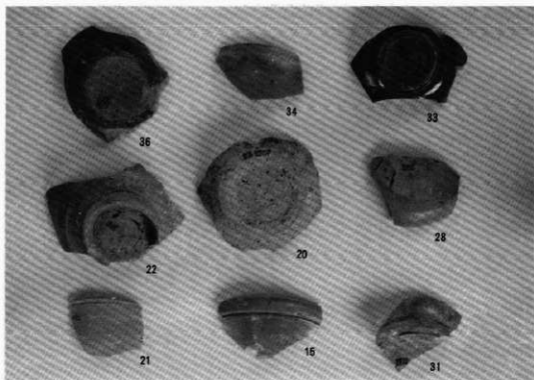


(断面視写、墨書片)

国産陶器

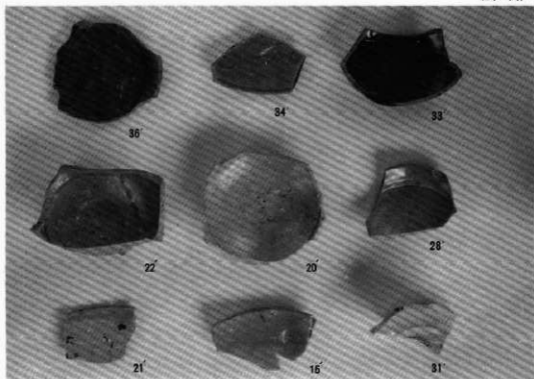


図版7 輸入磁器



(外面)

(内面)

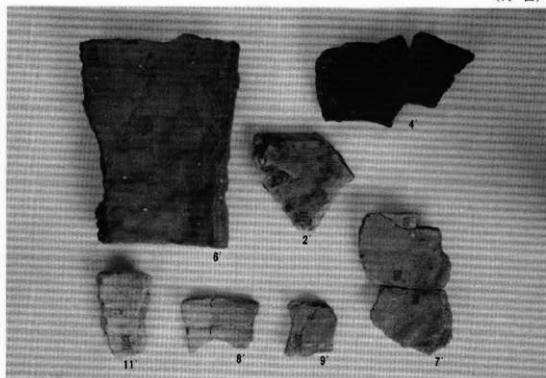


図版8 埴輪・製塩土器

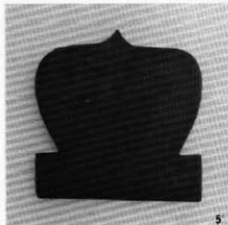
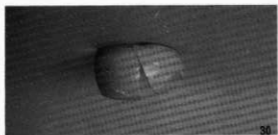
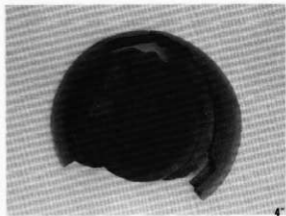
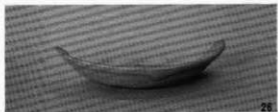
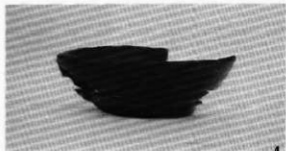
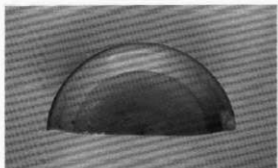
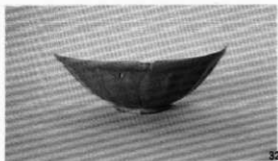


(外面)

(内面)

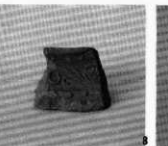
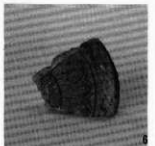
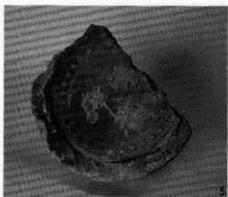
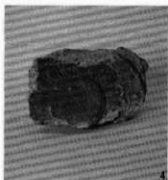
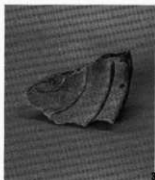


図版9 輸入磁器・木製品



(縮尺不同)

图版10 軒 瓦



奈良女子大学構内遺跡

発掘調査概報Ⅱ

昭和59年3月30日発行

編集 奈良女子大学埋蔵文化財
発掘調査会

発行 奈良女子大学

印刷 共同精版印刷株式会社
